

領域「環境」に係る保育実践の在り方について

本 村 弥 寿 子

A study on practicum of child care and education concern field of “Environment”

Yasuko MOTOMURA

キーワード：領域「環境」 実践事例 自然環境 文字・数・標識等との関わり

1. はじめに

本稿は、子どもと、子どもの身近な環境との豊かなかかわりを支える保育者の援助について、事例をもとに述べるものである。筆者が保育現場で見てきた子どもが環境とかかわる姿から、子ども一人一人の思いと、それを保育者がいかに受け止め援助を行うべきかを模索することで、保育の基本である「環境を通しての教育」の重要性を改めて見出したい。さらには、事例から見えてきたことを領域「環境」に係る授業内容に取り入れることで、そのねらいと内容を学生が理解できるようにしたいと考える。

2. 領域「環境」のねらいと内容

幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領の3法令には、「環境」は、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」と示されている。周囲の環境とは、子どもたちが園内や園外で直接見たり、聞いたり触れたりできる、子どもの生活圏内にあるものを意味している。このような子どもの身近にある環境に関わることを通して幼児期に育みたい資質・能力を子どもの生活する姿から捉えたものを「ねらい」とし、幼稚園教育要領では次のようにあげている。

<ねらい>

(1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々

な事象に興味や関心を持つ。

- (2)身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3)身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

これらのねらいを達成するために、周囲の人、動植物、自然、遊具、数量や図形、標識、文字などの身近な環境や事象を通して指導を行うことが、「内容」に示されている。

<内容>

- (1)自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2)生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3)季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4)自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
- (5)身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- (6)日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。
- (7)身近な物を大切に作る。
- (8)身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分な

りに比べたり、関連づけたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。

- (9)日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- (10)日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
- (11)生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
- (12)幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

上記のように、「環境」の内容には、子どもが身の回りの対象に興味・関心をもって親しみ、何かに気付いたり、工夫したりする経験が含まれている。このような経験は、飼育・栽培活動や科学遊び、社会見学などの特定の題材を設定した活動の中でのみならず、日常的な生活や遊びの中で生じていることである。保育者はこのことを十分に理解し、子どもたちの様々な経験を「環境」と関連させて考えることが必要である。

3. 保育者の様々な関わり

子どもたちが、身近な環境に関わり、気付いたり工夫をしたりしながら経験を重ねていくために、保育者はどのように関わっていけばよいのだろうか。

幼稚園教育要領解説には、教師の役割として、物的・空間的環境の構成を行う者、子どもの活動の理解者、協同作業者、憧れを形成するモデル、遊びの援助者となること等が大切であると示されている。保育者は、日々を子どもと共に過ごしなが、一人一人の育ちや思いを的確に捉え、必要な環境構成や関わりを適切に行っていかななくてはならない。では、領域「環境」で示されたねらいの達成に向けては、保育者は具体的にどのように役割を果たしていけばよいのだろうか。以下に、筆者の幼稚園勤務時の事例をいくつか書きながら、領域「環境」に示されたねらいの達成に向けての保育者の援助について考えてみたい。

4. 領域「環境」に係る事例

領域「環境」で示す、子どもの身近な環境とは、人、自然、遊具、文字、標識、数等様々である。

ここでは、その中でも、自然との関わりと文字や数等との関わりを取り上げ、領域「環境」に係る保育の在り方について考えたい。

これらを取り上げたいと考えたのには理由がある。まず、自然についてであるが、これは、人を含む地球上の様々な物質・生物すべてを含み、人の活動に大きな影響を与えている。そして、人の力ではどうにもならない偉大な力を持っている。つまり、子どもの育ちに大きな影響を与えるものであると考えられるからだ。一方、文字・数等に関してだが、幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、子どもが文字や数、標識等に関心をもつような指導を行うようにと示している。しかし、一般的には、大人がそれらを早期に子どもに教えることが必要と捉えられている傾向があり、実際保育現場でも、ワークブック等を利用して文字や数字を教えているところが少なくない。これは、保育者が、どのような保育によって子どもが文字や数等に関心をもつようになるのか、考えを深めることがないまま保育実践に当たっているからではないかと考えられる。

このような考えから、子どもに大きな影響力のある自然と、関わらせ方に迷いのある文字や数等について、事例をもとに保育の在り方を探りたいと思う。

4-1 身近な自然との関わり

<事例1> 「トウモロコシカレーです」

5歳児・5月

U子、N子、M子、R子が、園庭隅の東屋で泥まごとをしている。そこへ保育者が「お腹が空いたんですけど、何か食べさせてもらえませんか。」と声をかけた。子どもたちは保育者を椅子に座らせ、それまでに作った泥の料理を全て机に並べる。どの料理にもモクレンの実が入っている。「うわあ、おいしそう。何の料理ですか。」と保育者が尋ねると、4人とも一瞬黙って料理を見つめる。3秒ほどの間が空いて、

U子が「・・・とうもろこしカレーです！おいしいですよ！」と元気に答えた。R子も「そうそう、トウモロコシの料理なんです。ねえ！」と友達同士顔を見合わせる。「へえ、ほんとだ！トウモロコシがいっぱい入ってる！」と保育者も子どもたちの言葉を受け入れ、モクレンの実を指さしてさらに尋ねてみる。「ねえ、これ、本当のトウモロコシ？」するとM子が「いや、違うと思うよ。でも、似ているから・・・。」と恥ずかしそうに答える。「うん、似てるよね！どこにあったの？」と保育者。それにM子が「あっち！」と、5メートルほど離れた。ジャングルジム周辺を指さす。ジャングルジムの横にモクレンの木がある。

子どもは見立て遊びが好きである。様々なものを「～のつもり」として、自分の遊びに取り込んでいく。この時は、ヤングコーンほどの大きさのモクレンの実がたくさん落ちてのを見つけ、その大きさや形から、まさに「トウモロコシ」に見立てて料理を作っていたようである。

子どもたちは、「モクレンの実」という認識はまだ無かったと思われる。保育者は、彼女たちにとって「モクレンの実」が大切なのではなく、ジャングルジムのところにいっぱい落ちている、日頃あまり見かけない、トウモロコシみたいなものが大切なのだと感じ、実とモクレンの木との関係について話すことは控え、彼女たちの思いに寄り添うことのみ行った。数か月後か数年後かは分らないが、後に彼女たちも、「あの時、トウモロコシと見立てていたものはモクレンの実だった」「冬の終わりに花が咲くから、実はあの時期に落ちていたのだ」などと気付く時が来るであろう。そのためにも、今はモクレンの実をトウモロコシに見立てて遊び込むことが必要なのである。保育者は、「今」の子どもたちの思いを捉え、寄り添うことが必要だと考える。

どの園にも、様々な実や花をつける植物が植えられている。外部からの目をさえぎるためにとか、子どもたちが季節を感じられるように、葉・花・実を遊びに利用して、一層遊びが充実するように

など、植物を植える理由は様々である。理由がどうであろうと、園内の植物も子どもにとって身近な環境となる。保育者は、年間計画を立てる時点で、花壇にどのような植物をいつごろ植えるかを考える。植物を育てることにより植物も生きていることを子どもに感じさせたり、世話をする経験から多くのことを学ばせたりしたいと考えている。花壇に植える植物も重要な教材であるが、これに加え、すでに植えられている樹木も大切な教材である。よって、園のどこにどのような樹木が植えられているのか、花や実はいつ付くのか等を保育者が把握し、子どもたちの遊びや生活にどのように取り入れていけるかなどを考えることが必要であろう。保育者が園内の植栽に明るくなることが、子どもと植物、そして自然とのかかわりを豊かにすることにつながると考える。

<事例2>「チョコレートみたい！」

4歳児・5月

金曜日の片付け間近、前日に年長児が土山に水を流して泥遊びをしていた辺りに粒子の細かい土が集まり、粘土が固まったようになっているのをR子が見つけ、「あー！チョコレートみたい！」と声を上げて指でちょんちょんと突き始めた。保育者はR子の声を聴きつけて近寄り、「本当！チョコボール作ってみよう！」と言いながら、土を少し手に取って丸めてみせた。形が整いだすと、「おいしそう！R子も作る！」と、保育者の真似を始めた。そこにT子やH男も来て、片付けまで泥団子づくりを楽しんだ。



<その後の土山での様子>

土山の土は、砂が混ざったような目の粗い感じであった。日々子どもたちに踏み固められ、年長児数人でようやく穴が掘れる状態だったため、この時期は3・4歳児が土山で遊ぶ姿はまだ見られなかった。この週、土山で年長児が穴や溝を掘っては大量の水を流して楽しんでいて、その楽しい様子をR子は見ているのだろう。R子にとって土山で遊ぶ年長児は、新しい遊びを提示した人的環境であったと思われる。「大きい組さん、ここで何してたのかな」という気持ちで、園庭の端にある土山を誰もいなくなったところを見計らって見に行ったのではないだろうか。

R子は2年保育児で、4月に入園したばかりであった。そのため、入園後2か月弱のこの時は、園内を散策して好きな遊びや面白そうなことを探していたのかもしれない。そこに、周囲の土とは明らかに異質の、チョコレートのように表面がなめらかで茶色い土を見つけ、思わず心が躍ったのだろう。しかし、指先で恐る恐る触るしかできないR子だった。そこで保育者は、せっかくR子がチョコレートに見立てたのだから、一層チョコレートらしくなるよう、チョコボール作りに自ら取り組んで見せたのである。保育者が小さな泥団子を楽しそうに作る様子が、子どもたちの遊びのモデルになったと思われる。さらに、片付けまでの10分ほどではあったが、保育者が遊びの仲間として一緒に取り組んだことで、子どもは安心して泥団子づくりを楽しむことができたと思われる。このような保育者の関わりによって、子どもと土との関わりが深まり、土も様々な状態があり、状態によって固まりやすかったり崩れやすかったりするといった土の性質を子どもたちは学んでいくと考える。

<事例3> 「つらら、あった！」

4歳児・1月

保育室テラスの軒から溝に伸びている樋に、つららができている。子どもたちの目の高さの継ぎ目から漏れ出た水が凍ったものであった。保育者が「氷がある！」と声を発したところ、

15名ほどの子どもが集まってきた。

A男が「つららだ！」とうれしそうにつぶやいたため、「つららって言うんだ、この氷！」と保育者が感心したように言うと、すかさずK男が「そうだよ。水が凍ってできるんだよ。」と話し始めた。「ええっ、どうして凍るの？冷凍庫に入れたの？」と保育者が大げさに驚くと、A男が「ちがーう！昨日の夜、ものすごく寒かったのさ！だから凍ったのさ！」と熱心に保育者に説明した。周囲の子どものほとんどがA男の説明にうなづいていた。そこへ、年長児が、大きなつららを箱に入れて見せに来た。これを機に、子どもたちは大きなつらら探しを始めた。

木の下や固定遊具の周辺等、園庭の隅々をくまなく回ったが、子どもたちはつららを見つけられなかった。20分ほど歩きまわったところで「大きい組さんに聞いてみよう！」というA男の提案で尋ねに行くと、大きなつららは保育室テラスの軒にあったことを教えてもらった。その後は、軒という軒を見て回り、3～4本のつららを見つけ、皆満足した表情で保育室に戻ってきた。

長崎でつららができることはめったにない。そのため、つららができていそうな冷え込みの厳しかった朝を捉え、子どもたちがつららと関わる経験を積めるようにした。

保育者は、つららを見つけるとすかさず「氷がある！」と声を出した。様々な自然現象は、こちらの思い通りにはいかず、偶然を捉えなければ関わる機会を逃すことになる。保育者は機会を適切に捉えて、その事象や現象に子どもの興味が向くように援助することが大切である。

子どもたちがつららを探し回った道筋は、以前ダンゴ虫やセミなどの昆虫を探し回ったところであった。子どもはこれまでの経験を自分なりに活用しながら、新しいことに取り組んでいくものであることを実感した。しかしながら、残念なことに、ダンゴ虫を見つけた場所につららはなかった。つららがあるのは、これまであまり注目していない場所であった。これは、子どもにとっては新たな

な発見だったと思われる。この時子どもは、「つららを見つけない」という願いをかなえるための方法を、自分たちなりに考えていただろう。その方法の一つがA男の「年長さんに尋ねる」というものであった。保育者が指図したり教えたりするのではなく、子ども自身が考えて行動する様子を、たとえ失敗したり時間がかかったとしても、子どもに任せることが大切であると感じた。さらに子どもたちは、つららを探すことによって、どのような場所につららができるのかについて、何かしら感じる機会になったと思う。

子どもは、興味のある物や事にじっくり関わるからこそ、その物・事の特徴や性質について理解を深めていく。保育者は子どもが自分なりに考えて行動する様子を温かく見守り、自ら気付いたり発見したりする面白さを感じられるよう支えていくべきであろう。

4-2 文字や数等との関わり

<事例4> 「招待状、作ろう！」

5歳児・6月

5歳児の園外保育で、「ペンギン水族館」へ出かけた。子どもたちは、楽しかった経験を3・4歳児にも伝えようと考え、翌日から「ペンギン水族館ごっこ」を始めた。保育室の中にペンギンの水槽を再現し、ペンギンダンスを披露したり、お客さん（3・4歳児）が餌やり体験をするコーナーを作ったりした。他にもバーチャルシアターのコーナーを工夫して作ったり、お土産売り場を再現したりと、5歳児2クラスの子どもたちが協力してごっこ遊びの場を作っていた。

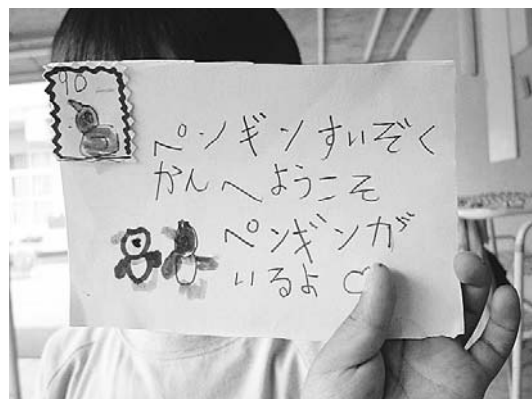
遊びが始まって2日間は、製作が主であったため、興味を持ってのぞきにきた年少者を十分もてなすことができなかった。「まだできてないんです。後で来てください。」「ここはまだ入らないでね。」などと言うことが多かったため、せっかく来た3・4歳児も他の遊びに流れてしまった。そのため、年長児たちが3・4歳児に来てほしいと思った時には、数名しか来な

かった。

「小さい組さん、全然こないね」「どうしよう」「ポスター作ってみようか」「呼びに行こう」と、それぞれの子どもが3・4歳児を呼び込む方法を考え、行動に移していった。

S男は、「招待状作ろう！」と、一人で黙々と画用紙に絵や文字を書き込んでいった。「郵便ごっこ」で経験したことを取り入れたのか、切手も貼りつけた。しかし、2枚作ったところで招待状を丸め、顔をしかめて動かなくなってしまった。「S男君、できた？」と保育者が尋ねると、ふくれっ面になり首を横に振った。そして、「“ぺんぎん”って書いたけど、本当の水族館はちょっと違ってた！」と訴えてきた。保育者はこの言葉でS男のつまづきを理解し、「なるほどね。こんな字じゃなくて、こんなに書いてあったんだよね。」と言いながら傍の画用紙に“ぺんぎん”と“ペンギン”を書き並べた。

S男は、保育者が書いたカタカナの“ペンギン”の文字を熱心に見て写し、3・4歳児クラス分の招待状を丁寧に書きあげて渡しに行った。



S男は知的好奇心が旺盛で、興味を持ったことに集中し、納得のいくまで関わる子どもであった。ひらがなも早くに書けるようになっており、様々な遊びの場面で積極的に文字を書く姿が見られた。しかし、このころは、文字に“ひらがな”“カタカナ”があるという認識はなかったようである。ただ、同じ読み方でも異なる表記があるということを感じ取っていたようだ。

保育者は、S男が文字に対して感じていることを、S男の言葉から理解した。それは、S男がカ

タカナで書きたいと思っているということだった。そこで、“ぺんぎん”と“ペンギン”の2種類を見比べられるように書いて見せたのである。ここで、“カタカナ”という言葉のをそれとなく伝えようかと思ったが、S男が“ペンギン”と書けばよいことが分かって満足している様子であったことと、“ひらがな”という言葉の日頃から使っている様子は見られなかったことから、言葉を教えることは控えた。

子どもが文字や言葉等を覚えるのは、日頃の生活や遊びの中で必要感に迫られて「書きたい」「伝えたい」「知りたい」と思った時である。大人が一方的に教えたとしても、分かる楽しさや知る喜びは十分に味わえないままであろう。保育者は、子どもが読んだり書いたりする必要があると感じている時を逃さず伝えていくことが必要である。

<事例5> 「人数を合わせなきゃ」

5歳児・6月

保育者も仲間に加わって、15名でドンジャンけんゲームをする。じゃんけんなどでチームを決めることなく、自然に9人と6人のチームに分かれた。1回目は9人のチームが勝った。

「ずるい！だって、そっちの方が人数多いから勝つさ！」と、6人チームのM子が叫んだ。「人数を合わせなきゃ！」とI男がそれぞれのチームの人数を数え、「確かにこっちが多い！」と9人チームを指さして言った。次の瞬間、5秒ほどの沈黙が続いたので、保育者が「どうしたらいい？」と切り出してみた。「そっち（9人の方）、3人やめて！」「えー、それじゃかわいそう！」「(周囲に呼びかけるように) 誰か、3人仲間に入って！」「・・・。」周囲には、ドンジャンけんゲームに加わりそうな子どもはいなかった。

「分かった！3人こっち（6人の方）に来たらいい！」と一人が叫んだが、それに対し別の子どもが「そうしたらこっち（9人の方）が少なくなるじゃん！」と反論した。「・・・。」再び沈黙。その時、6人チームのJ男が、「ほら！

そっち（9人の方）から一人来てさ、もう一人誰か仲間に入ったらいい！」と笑顔で叫んだ。しかし、他の子どもはよく分かっておらず、「えー、何で？」の声が上がる。これにはJ男も答えられず、口をパクパクしていた。そこで保育者が、「一人来るのね。」と9人チームの一番後ろの子どもを6人チームの列に連れて行き、「ちょっと数えてみようか。」と子どもに両チームを数えることを促した。「あ、7人と8人！」「7人のところに、あと一人来たらいいい。」「なるほど。」「ああ、そういうことか。」とJ男の案を理解し納得した。

その後、15人で仲間を一人募りに行くが、誰も加わらなかった。そこでI男が、「じゃ、先生、監督ね！」と提案したため、残念ながら保育者は監督として列から外れ、子どもたちは7人ずつのチームで遊びを再開した。



年長児になると、集団でルールを守って遊ぶことを好むようになり、それまで関わりの少なかった友達とも声を掛け合うようになる。この時は、ドンジャンけんゲームのルールを少し複雑にした遊びを数日前に保育者が紹介し、その面白さを徐々に年長児全体に広げていたところであった。

この遊びは、チームの人数が多少違っていても支障はなかったのであるが、子どもたちはそれまでに楽しんだ様々なゲームの経験から、チームの人数を揃えたほうが公平であると思っていたようだった。そこで、子どもたちの人数合わせに保育者も付き合うことにした。

この時は、子どもの中に、「9は6より3大きい（多い）」と瞬時に理解できる子どもが存在す

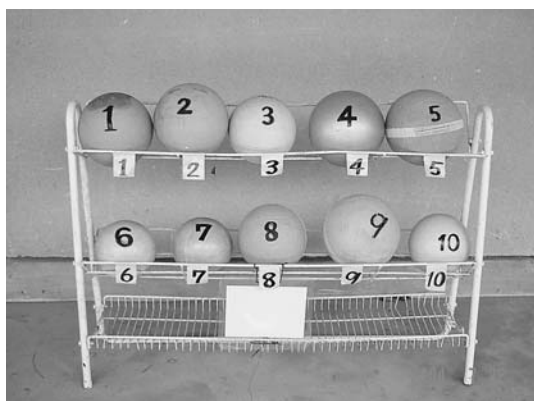
るようになっていた。このような、数に対しての感覚が鋭い子どもの存在をきっかけにして、日々の生活や遊びの中で、子どもと数との関わりを深めていくと良いのではないだろうか。

この日は、奇数を2つに分けるという難問に一生懸命取り組む子どもの姿が見られた。それだけ、ドンじゃんけんゲームに真剣に取り組んでいたということであろう。J男が解決方法を導き出したものの、言葉では周囲の子どもに伝わらなかったため保育者が実際に子どもを動かして援助した。具体的に子どもを動かして示したことで、J男の提案がようやく他の子どもにも理解されるに至ったようだ。この時期の子どもは、具体物を操作しながら思考を進めていくという発達段階である。日常生活や遊びの中で、今回のような経験を積み重ねることが、数に対しての感覚を育む一つの方法であると考えます。

<事例6>「ボール置き場の工夫」

～数の感覚を育む環境構成の例～

写真1のようなボール置き場の環境を整えた。



<写真1>

子どもが園内の環境に自らかかわって遊びを深められるよう、日々の環境を見直し、整備を行った一例である。ボール置き場のワイヤー製の棚は、いつも渡り廊下の端において子どもたちが持ち出しやすいようにしていた。しかし、片付け忘れてそのままボールを紛失してしまったり、全て一番上の棚に重ねて置いてしまい、納まりきれずに落ちてしまったりしていたため、保育後、保育者が

数を数えきれいに並べ直していた。保育者として当然の環境整備だが、「子ども自身でボールをきれいに並べ、しかも片付け時に子どもが数を確認できる、つまり、子どもたちで管理のできるボール置き場にしたい」と考え、環境構成の工夫を試みた。

まずは、一つ一つのボールに数字を書き込み、園のボールは10個であると視覚的に分かるようにした。そして、棚にも数字を書いたテープを貼り、同じ数字のところにボールを置くようにした。このような工夫により、数字が分からない子どもでも、数字の形から片付ける場所を理解するだろうと考えた。そして、年中・年長児ともなれば、片付け時にすべてボールがあるか、無ければそれは何番のボールかを自分たちで確認することができると考えた。

さらに、もう一点工夫をした。それは、一段に5個のボールを置くようにしたことである。このように置くことで、「5と5で10」「5が2つで10」という感覚を子どもが自然に持つことができるようになるのではないかと、そして、将来、これが「 $5 + 5 = 10$ 」「 $5 \times 2 = 10$ 」につながるのではないかと考えたのである。

5. 子どもと子どもの周囲の環境との豊かな関わりのために

保育の基本は、「環境を通して行う」ことである。子どもが身近な環境に興味や関心、親しみを持ってじっくりとかかわることで、その子どもなりに様々なことを自分の中に取り込んでいく。故に保育者は、子どもの興味・関心を捉え、思いを探りながら、子どもが自ら進んで関わる環境を、願いを込めて計画的に構成していくことが大切である。そのためにも、保育者は、園内や園の近隣の自然環境、様々な施設、人的環境等について把握し、適切に活用する努力が重要である。例えば、園を中心とした地図を用意し、保育に活用できる人的環境や物的環境を記しておくなどの工夫をすることで、子どもの身近な環境が把握がしやすくなるのではないだろうか。

自然現象に関しては、保育者や子ども、つまり

人間の思いのままにならないことがほとんどである。事例3のように、ある朝つららができていたり、また、雨が上がったとたん彩虹が出たりということは、予測がつく時もあるが、偶然に出会うことが多い。保育では、このような偶然の出会いを逃すことなく取り入れていくことが大切である。保育は計画に基づいて実践がなされていくが、計画に縛られることなく、子どもの興味・関心に寄り添って、様々な事象に臨機応変に対応できる保育者であるべきである。

子どもの興味・関心や、その時の思いを的確に捉え、子どもに寄り添った保育を展開するためには、子どもと共に、仲間の一員として生活や遊びを楽しむことも大切である。保育者として、大人として、よいと思われることや正しいことを子どもに伝えることは当然のことだ。しかし、子どもは、大人から見ると無駄と思えるようなことを、失敗と成功を繰り返しながら様々なことに気付き、考え、自分なりの理解を深めていく。そのような子どもたちの行動、思い、思考に保育者がしっかりと寄り添うことで、子どもは自分で考えて行動する楽しさを知るのではないだろうか。自ら進んで環境に関わり、さらに、存分にその環境と関わる子どもを育むためには、保育者が先走った援助を行わないよう留意し、子どもの思いや考えにしっかり付き合いながら成り行きを楽しむゆとりを持つことが大切だろう。

文字や数等に関しては、小学校以降の教科学習に直接関係するものであるため、大人は子どもが小学校入学後困らないようにと早目に教えようとする傾向がある。しかし、子どもが文字や数に興味・関心がない状態の時に、また、子どもが必要感を感じていない時に教えられても、本当に知りたいときに丁寧に教えられた時と比べて分かる喜びや知る楽しさは味わえないだろう。与えられた知識ではなく、子ども自身が自ら得た知識となるよう、保育者が子どもと文字や数等とのかかわりのタイミングや程度をしっかりと吟味することが大切であると考えられる。

日常生活の中で子どもの身の回りにあふれている文字や数や標識等である。それらの存在に子

どもが気付き、自分の生活に取り入れようとする時を保育者は逃さず、その意味を伝えたい。

また、それらが身の回りにあふれているからこそ、子どもがその存在に慣れてしまっ関心が向かないこともあるだろう。園では、子どもの発達段階に応じて子ども自ら関心が向くよう、文字や数をどのように環境に取り入れていくかについても、十分に考えていくことが大切である。

6. おわりに

子どもの、身近な自然や文字・数等とのかかわりの事例から、領域「環境」に係る保育の在り方や教師の援助について振り返りを行った。そこから改めて見えてきたことは、子どもの身近な園内・園外の環境について保育者が把握することの大切さである。どこにどのような人的環境・物的環境があるのか、それはいつごろどのような状態になるのか、いつごろ保育で活用できるか等をしつかりと把握し、見通しをもって子どもとその環境がかかわる保育を計画的に行うことが大切である。この点は、本学幼児教育学科の授業においても、学生に是非経験させたいと考える。本学を園とみなして、学内と近隣の環境を調べ、保育にどのように活用できるか考える機会を取り入れたい。授業でこのような取り組みを学生が経験しておく、現場ですぐに活用できると期待している。

子どもの興味・関心に寄り添い、適切に、機会を逃さず環境との関わり場の設けることも重要である。常に子ども理解に努め、計画に縛られることなく柔軟に保育を展開することこそ、子どもが主体の保育となる。授業に模擬保育を取り入れ、学生が保育者役と子ども役に分かれて活動を展開する経験も是非取り入れ、場の様子を読み取って、保育者として対応する機会も授業に取り入れたいと考える。

保育は、環境を通して行うことが基本である。保育者が子どもの身近にある環境の重要性に気付き、有効に保育に取り入れていこうとする気持ちや実践力を身に付けられるよう、さらに子どもと周囲の環境の様子を見つめ、保育の在り方について考えを深められるよう、今後の授業の工夫を図

りたい。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省 幼稚園教育要領解説 2008年改訂版
- 2) 文部科学省 厚生労働省 内閣府 平成29年告示
幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こ
ども園教育・保育要領 2017年6月 チャイルド本社
- 3) 谷田貝公昭監修 大澤力編著『実践保育内容シリー
ズ 環境』2015年 一藝社
- 4) 無藤隆監修 福元真由美編者代表『事例で学ぶ保育
内容 領域 環境』2007年 萌文書林
- 5) 酒井幸子・守巧編著『保育内容 環境 あなたなら
どうしますか?』2016年 萌文書林
- 6) 永野重文・進野智子編著『幼児が夢中になる時・・・
幼児が自ら関わる環境の工夫と援助の見直し』2005
年 北大路書房
- 7) 長崎大学教育学部附属幼稚園 『平成15年度 幼稚
園教育研究大会研究紀要 幼児が自らかかわる環境の
工夫と援助の見直し -学ぶ力へつながる幼児の知的
好奇心を培うために-』2003年 32・33頁 39頁
- 8) 長崎大学教育学部附属幼稚園 『平成19年度研究紀
要 豊かな学びをはぐくむために -言葉を通して
-』2008年3月 101・102頁